

第5節 奈良山の山岳靈場・信仰遺跡について

1 現地調査の契機と方法

等妙寺旧境内の調査は本報告書第1分冊にて報告されているように、平成3年（1993）の確認調査を端緒として、平成24年（2012）からは平坦部A（如意顕院跡）の発掘調査を進めてきた。寺院中枢部の具体的な姿が明らかになりつつあるわけだが、これまでの発掘調査はあくまで「中世山寺」という認識に立ったものであり、長らく旧寺域周辺に存在する行場や関連地などの山岳靈場・信仰遺跡の持つ意味や、関連性については十分に説明し得なかった。詳細な経緯・経過については第1分冊第1章第5節で触れているため割愛するが、こうした状況の中で平成27年（2015）より、町内遺跡発掘調査事業の一環として奈良山山岳靈場・信仰遺跡分布調査を開始することとなった。

しかしながら、旧寺域周辺には未踏の山岳靈場・信仰遺跡が数多に想定されることに加え、自然崇拜を基本とした信仰の結果であり、人工物の造作をほとんど行わず、遺物もほとんど遺さないという山岳靈場・信仰遺跡のもつ特殊性がかえって分布調査上の障壁となってしまう。山中という広大な空間を限なく踏査することはあまりに非現実的であり、その実態に迫るために山岳靈場・信仰遺跡を熟知した有識者の指導、協力を得ながら、考古学のみならず文献史や民俗学、美術史、宗教学などの様々な学問分野から学際的な調査を実施するのが望ましい。現地調査にあたっては近年、調査・研究が活況を帶びている九州の事例〔岡寺2017等〕を主に取り入れ、以下のような方法を行った。

（1）GPS（全地球測位システム）を用いた調査

山岳靈場・信仰遺跡や関連地点の位置情報はもちろんのこと、現在位置や踏査の足跡を記録でき、山中での調査を正確、簡便かつ安全に行うために極めて有効である（写真3-6）。

（2）考古学的手法を用いた測量調査

平板、オートレベル、電子距離計、トータルステーション（遺構実測システム）を用いた測量調査を行っている。単に遺跡・遺構の記録を目的とするだけではなく、観察を通じて山岳靈場・信仰遺跡が持つ空間の意味を読み取り、図化する点においては一般的な測量とやや異なる（写真3-7）。

（3）歴史資料の調査

地名や絵図、地誌類といった歴史資料の調査も欠くことはできない。特に奈良山山岳靈場・信仰遺



写真3-6 調査に用いたGPS



写真3-7 測量調査の様子（H28、彦惣岩屋）

跡分布調査における重要資料の一つとして「目黒山形模型・目黒山争論裁許絵図」が挙げられる。

目黒山形模型は、江戸時代前期の寛文5年（1665）に製作された木彫りの地形模型である（写真3-8）。伊予国宇和郡目黒村（吉田藩領・現松野町）と同郡次郎丸村（宇和島藩領・現宇和島市）との間で明暦4年（1658）に起こった鬼ヶ城山系の境界をめぐる争論の中で、幕府評定所に提出した裁判資料の一つとして製作された。模型の範囲は松野町の目黒川流域を核に鬼ヶ城山系全域に及び、まさに「奈良山」そのものである。当時の土地利用に関する情報が豊富で、山、平地、植生、道、河川、村境、人家など細かく表現されている（写真3-9）。さらに谷や尾根には白色で多くの書き込みがあり、等妙寺や磐座（山中修行において神仏を降臨させる岩塊）など山岳靈場・信仰遺跡に関するものとしては「等妙寺火道ノ頭・古等妙寺・大師ヶ森・等妙寺・正連寺跡・權現ヶ森・石の鳥井・鬼ヶ城・船岩」などが確認できる。一方の目黒山争論裁許絵図は、この争論の裁許結果を記した絵図で、模型同様に土地利用の実態を伝えている（詳細は第2分冊第5章山本論文参照）。

両資料は、中世期の景観や土地利用がまだ大きく改変されていないであろう江戸時代前期に、現地の詳細な踏査と高精度な測量に基づいて製作されていることから、奈良山山岳靈場・信仰遺跡の現地比定においても大きな足掛かりとなっている。



写真3-8 目黒山形模型全景



写真3-9 目黒山形にみえる等妙寺旧境内周辺



図3-56 等妙寺旧境内周辺の山岳靈場・信仰遺跡位置図

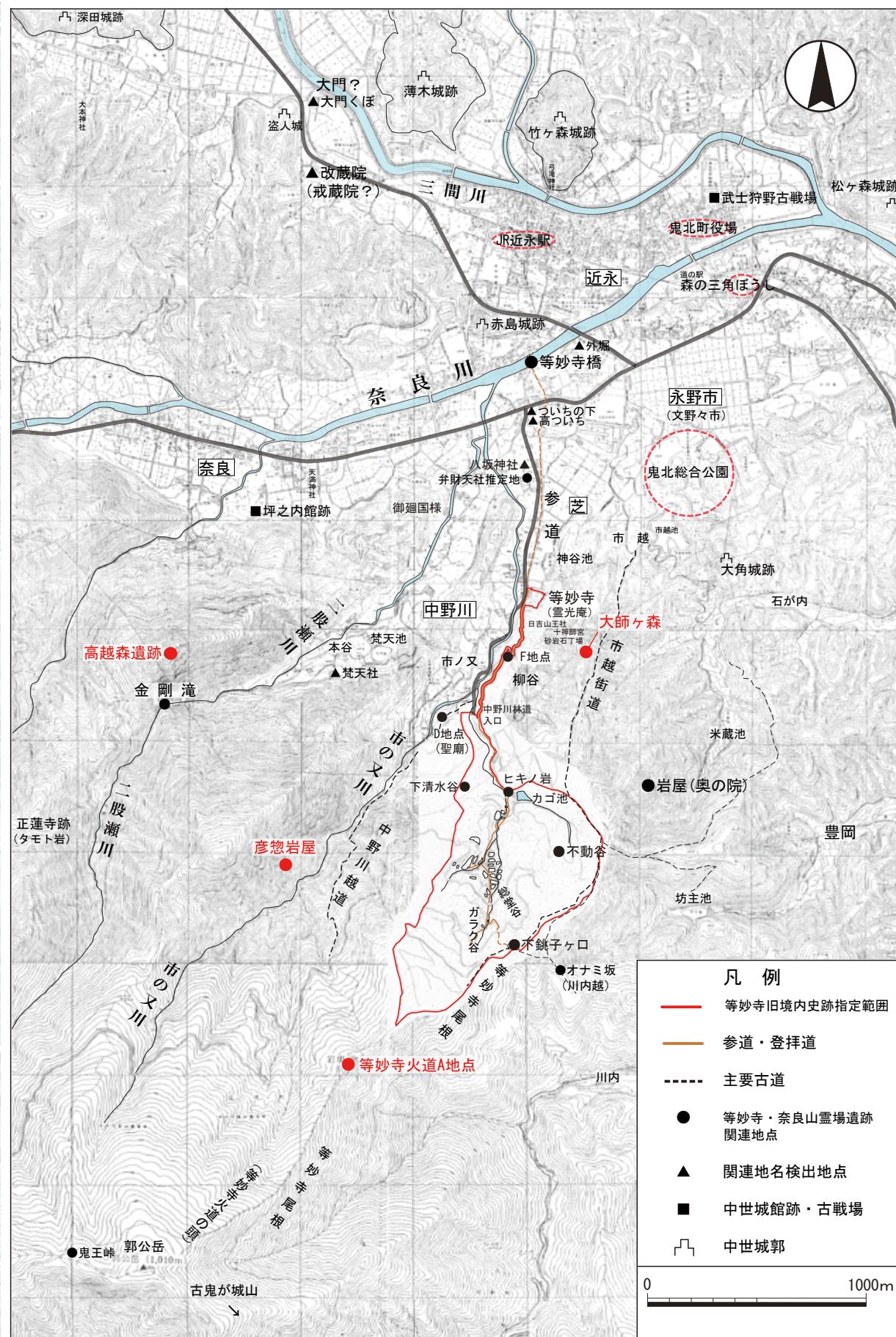


図 3-57 等妙寺旧境内周辺の山岳靈場・信仰遺跡位置図

2 奈良山の山岳靈場・信仰遺跡

ここでは近年調査を実施した山岳靈場・信仰遺跡のうち、等妙寺旧境内周辺に所在する主要な遺跡の概要を報告することとしたい（図3-56、3-57）。

（1）彦惣岩屋

ひこそういわや

彦惣岩屋は等妙寺旧境内の西側、市の又川が流れる谷を挟んで延びる尾根の中腹、標高400～450m付近に立地する（図3-57）。かねてよりその存在が知られており、平成16年度及び平成18年度報告書では行場の可能性のある地点の一つとして報告されている〔鬼北町教委2005・2007〕。平成28年（2016）11月より詳細な踏査、測量調査を実施したところ、広範囲において人為的な造作が確認され、相当規模の山岳靈場・信仰遺跡であることが判明した。

測量調査を実施したのは約50m四方、比高差約50mの範囲である（図3-58）。その最も低位には自然の作用により形成された窟を4箇所発見し、中でも最も規模が大きく中心岩屋と呼称する窟①の前面には土留め石積みを築き、10m²程度の小規模な平場（柴燈護摩壇）を造出している状況が認められた（写真3-10、3-11）。窟①は東に開口し、その入り口正面の平場上には自然石を径80cm程度の円形に配した石組遺構が表土下で検出され、柴燈護摩炉跡と考えられる。また、窟①の入り口には

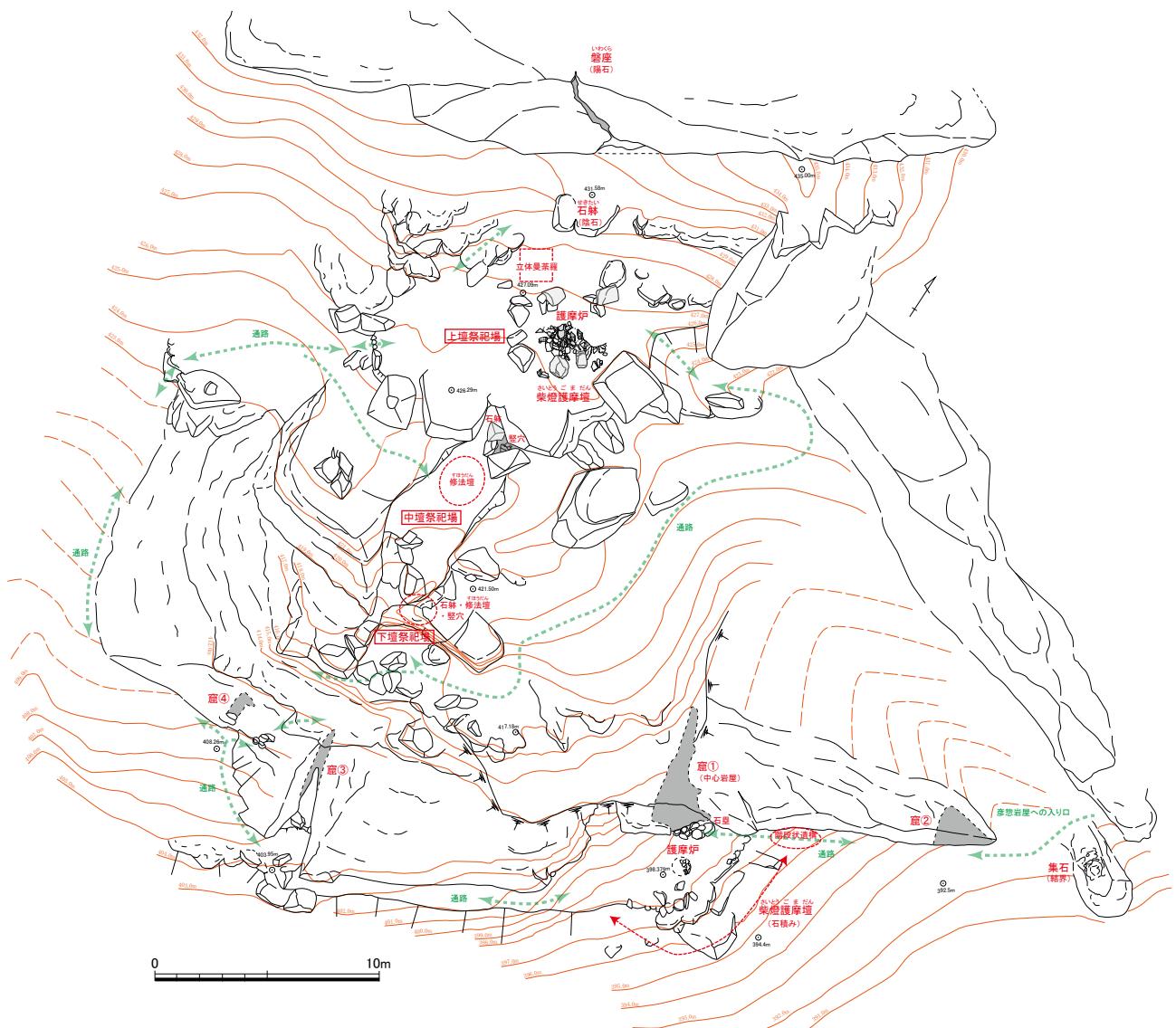


図3-58 彦惣岩屋の構造（平面図）



写真 3-10 彦惣岩屋 (右上: 中心岩屋の入口)



写真 3-11 窟①柴燈護摩壇の石積み



写真 3-12 窟①柴燈護摩壇へと至る階段状遺構



写真 3-14 上壇祭祀場・柴燈護摩壇より磐座を望む



写真 3-13 下壇祭祀場より磐座を望む



写真 3-15 上壇祭祀場の柴燈護摩炉



写真 3-16 彦惣岩屋窟①と前面に設けられた
柴燈護摩壇（愛媛県鬼北町）



写真 3-17 彦山六峰を構成する檜原山行者岩屋と
入口に隣接する柴燈護摩壇（大分県中津市）

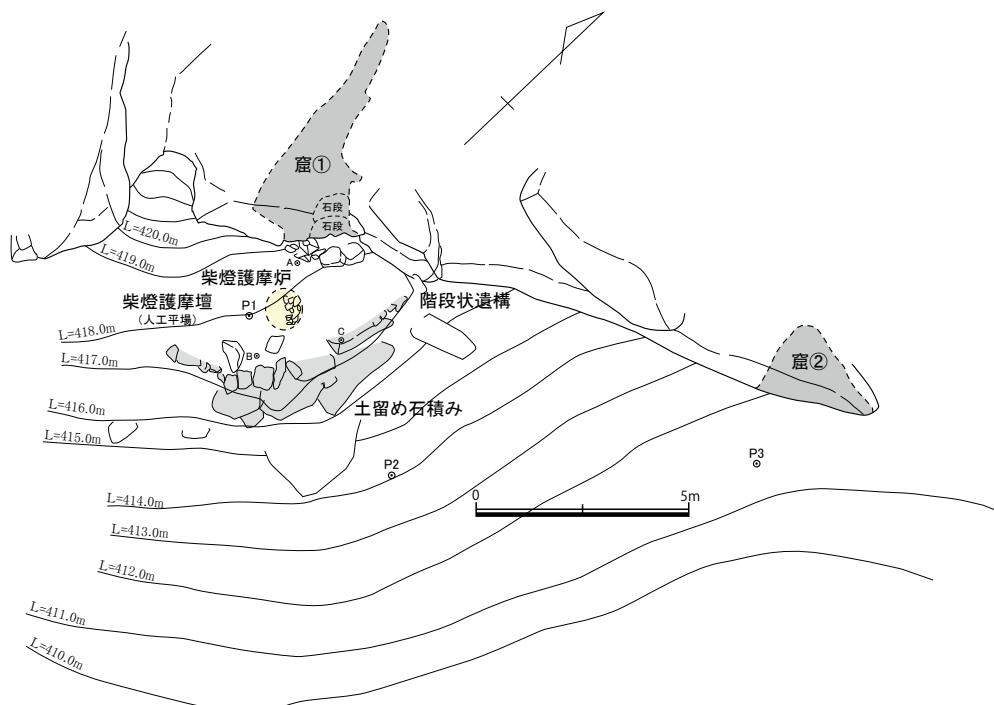


図 3-59 彦惣岩屋窟①と柴燈護摩壇の関係（平面図）

小振りな石を石墨状に積んでおり、風除けを企図したものと思われる。加えて窟①及び柴燈護摩壇へと至る通路上には石を階段状に積むなどの造り込みも見られた（写真 3-12）。それらの上方には、さらに大小 3 段の平場が設けられており、最も高位に位置する上壇祭祀場正面奥には巨大な岩壁、その手前に岩塊が鎮座し、前者は磐座（神靈を神界から降下させ、それが宿る座として特別視された岩）、後者は石躰（神靈の依り代となる岩）と考えられる（写真 3-13、3-14）。そのさらに手前には円形石組による柴燈護摩炉跡が検知された（写真 3-15）。ここで補足しておくと、柴燈護摩は仏教の火に重点を置く護摩とは異なり、山岳修験・修験道独自の野外で焚かれる護摩のことである。生木を積み上げて火を燈し、煙を立ち昇らせることにより天空の神仏に祈りを伝えるもので、狼煙の意味合いがあるという。

彦惣岩屋窟①の前面には石積みにより人口平場を設け、柴燈護摩壇としていることは先に述べた通りであるが、こうした構造は大分県中津市に所在する彦山六峰の一つ、檜原山行者岩屋と共に通ることが山本義孝氏の教示により判明した（図3-59、写真3-16、3-17）。北部九州との繋がりを示す紛れもない証左であり、注目される。

この場所では洞窟や岩盤に対して神靈が宿る空間と認識し、修行者（宗教者を含む半僧半俗の山棲みの民を想定）が巡礼、柴燈護摩など修法を執り行い、参籠するなどの山中修行がなされたと考えられる。神聖な空間ゆえに遺物の出土がなく、年代の確たる証拠が得られていないが、石積みの技法などから中世等妙寺と並行する時期が想定される。

（2）高越森山遺跡

たかごえもりやまいせき
高越森山遺跡は、地元でトンギリ山と呼ばれる急峻な山容を呈した高越森山（標高477m）の山頂に立地する（図3-57、写真3-18）。遺跡はかつて戦国期に鬼北町奈良地区を拠点とした坪ノ内氏の城「川後滝城跡」とされていたが、戦国期の城とは考えにくいことが判明した。

遺跡は頂部の狭い平坦面1から西方向に、曖昧な平坦面2・3が続き、その周囲は土塁ないしは石塁で囲まれている。土塁・石塁の内側は傾斜が緩く、頂部の石組遺構（S X O 1）を中心道が廻るという構造となる（図3-60）。

特筆されるのは、頂部に築かれた平面方形の石組遺構（S X O 1）で、基壇状に石組し、中央に2枚の板石を立てて配している。石組遺構の裾部では、表土下で炭化物の散布が確認された（写真3-19、3-20）。なお、遺物は全く採取されていない。

立石を伴う石組遺構の東を正面とすると、その背後には高月山（東高月）を望むことができる。石組遺構は柴燈護摩壇と推定され、高越森山は山中修行の際に信仰対象の山を遥拝しながら、神仏に狼煙を上げて祈りを伝える場と考えられる。



写真3-18 高越森山遺跡遠景



写真3-19 高越森山遺跡 石組遺構S X O 1



写真3-20 石組遺構S X O 1 裾部の炭化物検出状況
(南より)

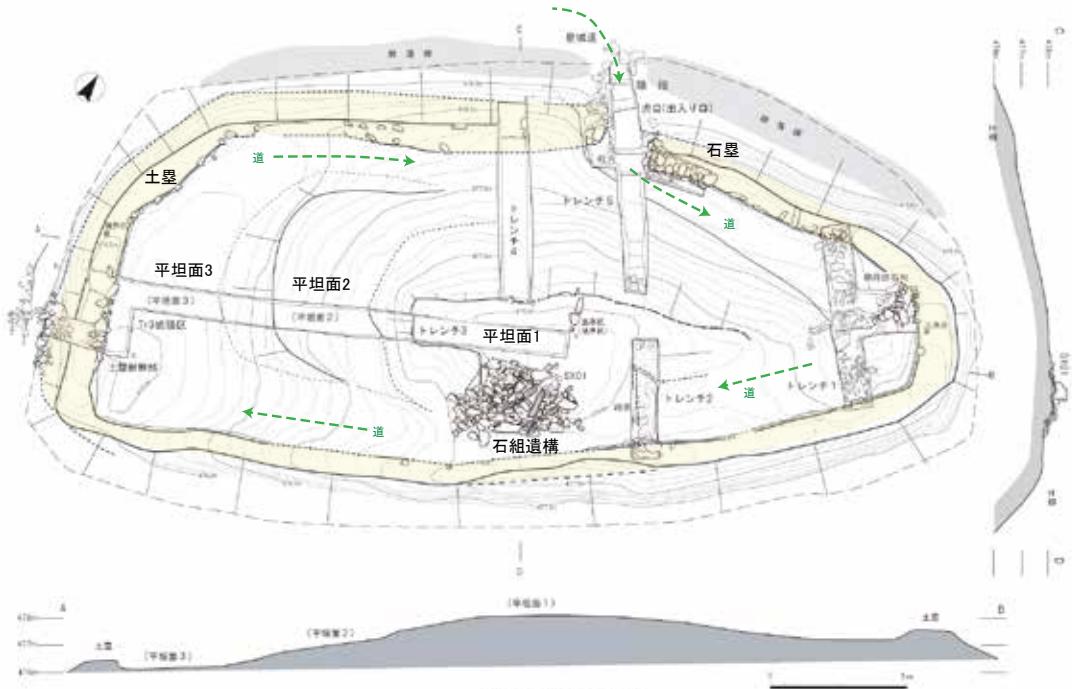


図 3-60 高越森山遺跡平面図

(3) 大師ヶ森

江戸時代前期作の目黒山形模型に記載があることから発見に至った「大師ヶ森」地点は、等妙寺旧境内中心部から北東方向、郭公岳から伸びる等妙寺尾根から派生し、緩やかに続く尾根の先端部に立地する（図 3-57、写真 3-21）。

大師ヶ森からさらに北西方向に派生する小尾根を約 250 m 下ると、現在の等妙寺境内、日吉神社直上の人工平場に至る。そこはかつて中世期に、日吉神社（山王宮）の前身である十禪師宮（十禪師：比叡山の守護神である日吉山王神の上七社のうち第 6 番目の神で、等妙寺を開いた戒家と呼ばれる天台戒律僧団が特に崇拝したと考えられている）社殿が存在したと推定されている場であり、このような位置関係からも重要地点と目された。

現地調査の結果、尾根の先端部上で、縁辺及び中央に集石（磐座か）を伴う多角形状の土壇を検出したほか、土壇上に時期の異なると考えられる礎石が見つかった（図 3-61、写真 3-22、3-23）。土壇の東方向には階段状遺構を設けている（写真 3-24）。郭公岳側に当たる土壇南方向の尾根はやや幅狭となるが、稜線上では柴燈護摩壇の可能性がある方形石組遺構や、その他複数の石組遺構が検知された。また、尾根東面は比較的急斜面で巨石が露出するが、その裾部には通路を廻らしていたことが判明した（写真 3-25）。なお、遺物の採集はなかった。

各地の山岳靈場・信仰遺跡の調査を参考にすると、結界設定された靈山外周の結界線は、実際の尾根稜線上に想定で張り巡らされるという〔鳥取県三朝町教委 2019 等〕。その途中に所在する山頂部や



写真 3-21 等妙寺旧境内から大師ヶ森を望む

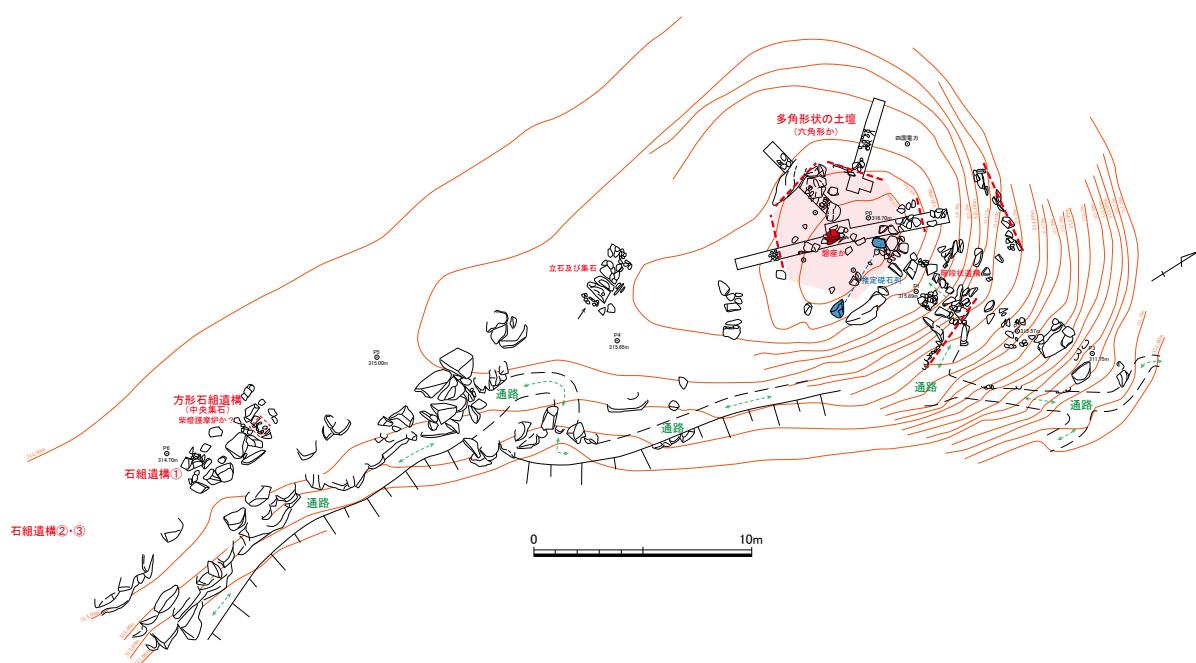


図 3-61 大師ヶ森平面図



写真 3-22 大師ヶ森で見つかった多角形状土壇
(南西より)



写真 3-23 多角形状土壇の中央集石（磐座か）



写真 3-24 多角形状の土壇へと至る
階段状遺構（東より）



写真 3-25 尾根東面の巨石と通路状遺構（北より）

高まりなど、地形の変換点に存在する岩塊に対しては神仏を降臨させる磐座とし聖地とする一方で、地形上で弱点とされる尾根上の鞍部などには人工的に集石を行って祭壇を設け、守護神を配置して「護法」とする例がみられる。大師ヶ森の性格としては、このような山中の結界守護のための「護法」を想定しておきたい。

(4) 等妙寺火道A地点

郭公岳（1,010 m）へと続く等妙寺尾根稜線上の傾斜が緩やかな地点、標高 630 m付近に立地しており、南東方向には古鬼ヶ城の山頂を望むことができる（図 3-57、写真 3-26、3-32）。等妙寺尾根は、目黒山形模型に「等妙寺火道ノ頭」と記載が見られる。この山稜を踏査したところ、いくつかの山岳靈場・信仰遺跡の存在が濃厚であったので、ここを調査上「等妙寺火道A地点」と呼称している。



写真 3-26 河後森城跡（松野町）本郭より
等妙寺火道 A 地点を望む



写真 3-27 緩やかな尾根稜線上に立地する祭壇遺構



写真 3-28 土壇（頂部）へ至る階段状遺構



写真 3-29 土壇と裾の配石
(北より／手前が山麓側)



写真 3-30 階段状遺構を構成する石の表面に
密にみられる円形叩打痕



写真 3-31 方形石組遺構

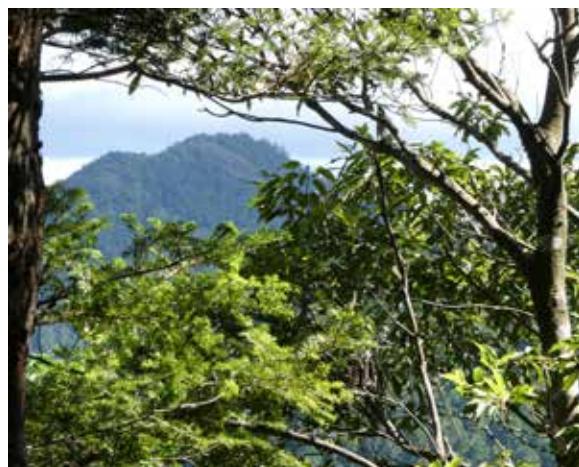


写真 3-32 等妙寺火道 A 地点から古鬼ヶ城を望む

ここでは人為的に石を配した祭壇遺構や土壇状遺構、方形石組遺構などを発見した。一見、自然的な様相を呈してはいるが、土壇やその裾部の配石、石組などに方形軸を意識した人為的造作が読み取れた（写真 3-29）。さらに火道 A 地点の北端、麓から見れば入口に当たる箇所には方形に区画した配石及び、土壇頂部へ接続する自然石を用いた階段状遺構が確認され、階段を成す石の表面には径 2～3 cm 程度の円形叩打痕が密に認められた（写真 3-28、3-30）。

現在調査継続中であるが、大師ヶ森などと同様に山中の結界守護のための「護法」としての性格を想定している。

（5）シャクナゲ群落

シャクナゲは修験道では靈樹・神木とされており、山岳信仰を考える上で重要な花である。等妙寺旧境内の背後に広がる鬼ヶ城山系の郭公岳や鬼ヶ城、横の森から御祝山までの各尾根稜線上（標高約 1,000 m 付近の一帯）などではシャクナゲ群落が確認され、毎年 5 月初旬頃になると白や淡い桃色、桃色の花を咲かせる（写真 3-33、3-34）。大峰山系を始め、各地の靈山・靈場の事例に照らせば、修験のために植生管理がなされたのちに野生化したのではないかと考えられる。



写真 3-33 鬼ヶ城山系のシャクナゲ



写真 3-34 鬼ヶ城山系のシャクナゲ
(横の森～御祝山)

3 奈良山山岳靈場・信仰遺跡と山中修行

これまでの現地調査によって、等妙寺旧境内の周辺には柴燈護摩壇（炉）を伴う遙拝所や護法、磐座、岩屋など複数の山岳靈場・信仰遺跡、そして背後の山系にはシャクナゲ群落の存在が明らかとなった。詳細な時期認定は課題であるが、奈良山が山岳靈場として開かれ、山中修行が実践されていたことを示す考古学的証拠といえる。最後にこれらの遺跡で行われたであろう山中修行について素描し、まとめとしたい。

修行者は尾根筋の稜線を軸に結界設定された神仏の宿る空間（山岳靈場）に身を投じ、個人や集団で峰々を縦走する「回峰行」や、籠る「參籠行」という動と静を組み合わせた山中修行を行うという〔山本 2006a・b〕。結界設定された山稜上には磐座、護法、供花（常緑樹）を行う華立などの遙拝所が各所に設けられ、回峰行ではこうした重要地点を巡り、柴燈護摩の煙を立ち昇らせて祈りを捧げるとともに、山中資源の維持や植生保全を行ったと考えられている〔山本義孝氏の教示〕。これを奈良山山中の遺跡に当てはまると大師ヶ森、等妙寺火道A地点は護法、高越森山遺跡は遙拝所に相当する。片や參籠行の拠点（參籠宿）と想定される遺跡は彦惣岩屋で、窟に籠る行為には一度死んだ修行者が山神の母胎から生まれ出るという、擬死再生の観念が存在している。

こうした山中修行の担い手（修行者）は、中世等妙寺寺院組織の下部構成員として、寺院運営や地域社会での宗教活動を下支えしたことは想像に難くないが、その具体像について現状では知る由もない。「宗教者を含んだ半僧半俗の山棲みの民」を想定しているが、このような人々をどのように呼称するのが適切であるかを含めて課題である。

以上のように奈良山山岳靈場・信仰遺跡の現地調査によって、奈良山を舞台とした宗教活動の一端が見えてきた。無論、その活動の舞台は現在の行政区を複数跨る広範な領域であり、奈良山の山岳靈場・信仰遺跡の実態を追究するには、近隣市町との連携が欠かせない。等妙寺旧境内のみならず、西南四国地域の地域史解明の上でも山岳靈場・信仰遺跡を熟知した有識者の指導、協力を得ながら、地道に調査を継続していく必要があると考えている。

【参考・引用文献】

- 岡寺 良 2017『背振山の山岳信仰の研究－背振山系山岳信仰・靈場遺跡現地調査報告書－』九州歴史資料館
織田誠司 2021「中世山寺遺跡 国史跡等妙寺旧境内調査・研究の新視角－「奈良山」とは－」『伊予史談』402号
伊予史談会
鬼北町教育委員会 2005『等妙寺跡（第2～6次調査）』第7集
鬼北町教育委員会 2007『等妙寺旧境内（第1～9次調査）』第8集
鬼北町教育委員会 2020『奈良山等妙寺の至宝と国史跡等妙寺旧境内展』等妙寺開基700年記念 鬼北町・愛媛県歴史文化博物館共催テーマ展図録
鳥取県三朝町教育委員会 2019『山岳修験II』三徳山総合調査報告書 第4集
長谷川賢二 2021「山伏集団の形成」『現代思想』第49巻第5号 青土社
山本義孝 2006a「修驗道」『鎌倉時代の考古学』高志書院
山本義孝 2006b「中世寺院をめぐる信仰 山岳修行」『季刊 考古学』第97号 雄山閣
山本義孝 2020「山寺研究から靈場研究へ」『山岳信仰と考古学III』同成社
山本義孝 2021『日吉山王宮を中心とした十禅師信仰と等妙寺のかかわり』令和3年度鬼北町埋蔵文化財活用事業 山寺講座資料 鬼北町教育委員会